

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第卷九十五第

戰時國債の課税特免

神戸正雄

ロックの財産論

白杉庄一郎

計畫經濟的均衡について

北野熊喜男

支那財政改革運動の結末

柏井象雄

テオドール・リット「ナチス國家
に於ける精神諸科學の地位」

河野稔

叢報

行發月七年九十和昭

テオドール・リット

「ナチス國家に於ける精神諸科學の地位」

河野 稔

本稿はテオドール・リットの著書「ナチス國家に於ける精神諸科學の地位」の紹介である。

リットは、本書に於て、ナチス國家と精神科學との結合を企圖し、先づ此のテーマを把握す可き基本的圖式を掲げる。其れに依れば、此のテーマは、哲學上相異なる二つの要因を結合する。即ち、ナチス國家は、歴史的瞬間的現實にして、云はば現代に拘束された時代的(zeitlich)なものである。然るに、此れを把握せんとする精神科學は、精神の自己意識を意味し、云はば現代の拘束を離れんとする超時代的(überzeitlich)なものである。従つて其處には、時代的なものと超時代的なものが結合されるが、此れは哲學上永遠の問題の一つ

であるのみならず現實の問題でもある。蓋し、現實に於ては、國家と精神科學は、夫々、他に盲目無力となる危険が存在し、精神科學が、正に此の危険を監視せんとするからである。

リットは、かゝる基本的圖式の下に、ナチス革命運動を取り上げ、ナチス國家が精神科學と結合する必然性及び、此の結合關係の性格を究明する。

ナチス運動は、一方に於て本能(Instinkte)を強く主張し科學を拒否せんとするが、他方に於て、自己の理念的基礎づけを要求する。而して、此の要求は差し當り神話(Mythos)と科學(Wissenschaft)との間を動搖するが、ナチスの神話は、ナチス運動の本能的側面を表示するとは云へ、意識的精神活動の下に神話形體を成立せしめるが故に、無意識的古代神話と異り、科學に接近すること明である。斯の故に、ナチス運動の自己意識は、精神科學の地盤に殺到し、ナチス國家は、自己の基本理念を形成せんが爲、必然的に、精神科學を奉

- 1) Theodor Litt, Die Stellung der Geisteswissenschaften im nationalsozialistischen Staate, Aufl. 2, Leipzig.
- 2) Th. Litt, a. a. O. S. 11, 12. リットは、かゝる奉仕關係を次の言葉で表現する。「精神科學者は、時代とともに生き、時代に仕へるべきであるが、時代の賞讃

仕せしめんとするのである。

かくて、國家と精神科學との結合關係は、奉仕關係 (Dienstverhältnis) として規定されるが、其の根本性格は何を意味するか。成程、精神科學は自然科學と異り、時代の中に實現された具體的精神を把握せんとするが故に、「時代の命令」を遵守する。併し、精神科學が外科學的權力の決定せる教義に對し、追加的基礎づけや個別的詳説をなすならば、其れは、時代の反響 (Nachhall, Echo) ではあるが、時代の説明者 (Deuter) ではない。斯の故に、精神科學は、「時代の命令」ともに科學の命令」を遵守す可きであり、其れは時代に拘束されるが故に、外科學的權力の命令に屈服す可きではないといふことが奉仕關係の性格と言へよう。

三

次に、かゝる奉仕を要請された精神科學の概念、指導力 (Leitkraft) 及び役割が究明される。

傳統的科學論に依れば、精神科學は、具體的、個別的、特殊なものを取扱ひ、一般的法則は自然科學に

保留されるが、リットは、これを誤謬なりとし、次のテーゼを掲げる。即ち、精神科學は、其の基底に、精神世界一般の本質、構造、組織に關する一般的概念、原理を明かにす可き「哲學的原理科學」(philosophische Prinzipienwissenschaft) 或は、「哲學的人間學」(philosophische Anthropologie) を有し、此れが、歴史を基礎づけ、歴史研究を可能ならしめる。即ち、斯學の宣言する一般的眞理に依れば、現實の精神は、時代的具體的なものであり、多様な人間、時代、共同體、民族、國家の中に分解して居る。かくて、此等の對象に應じ、此れを把握す可き個別的「精神諸科學」即ち「歴史科學」が成立するが故に、其れが基礎科學に委任されて居ること明である。

かく概念規定された精神科學は、次の實例で指導力を示す。即ち、反歴史的傾向を有するナチスの民族學 (Rassenkunde) は、歴史を派生的なものと見做し、本源的な民族、即ち、前歴史的、形而下的な「血」(Blut) や人種 (Rasse) を求め、或ひは民族の存在 (Völkische Dasein)

3) するものを與へるべきでなく、時代の必要とするものを與へるべきである。」
Th. Litt, a. a. O. S. 12. リットは本書に於て、哲學的人間學の方法論的特質並内容を究明して居ないが、上述せる科學理論問題は、次の如き、リットの著書で展開されて居る。Th. Litt „Wissenschaft, Bildung, Weltanschauung“

を生物學的 (biologisch) に規定して、當該人間像 (Menschentypus) の肉體 (Physis) を明かにし、或は、生物學的——超生物學的心的 (biologisch-überbiologisch, seelisch) に規定して、民族像の肉體と心 (Psyche) を明かにする。かくて民族學に依れば歴史は、血の現象又は肉體と心の保持者として理解される。然るに、精神科學によれば「前歴史的民族像は、無限の可能性の總體であり、此の可能性は、歴史に依つて確定され」、所謂歴史は、既定のもの、確認ではなく、未だ形體なきものを打刻 (Prägung) し、形體の變化せるものを改鑄 (Umprägung) せんとす⁴⁾。創造と改造の世界である。従つて、民族學の疆う處の民族の肉體は、豫定計畫の下に生かされ、歴史を有しない。故に、血の歴史を説くは、歴史承認の假面の下に歴史を破壊する事であり、民族の肉體——心の鮮明は、肉體と心の調和を意味せず、歴史を有して自ら生きる處の心的存在を、生物學的圖式の下に抑壓する事を示す。否、民族學者が、民族永遠の基底を知つた以上、何故歴史の迂路をとる必要があるか。かゝる見地

から、今や、民族學は、歴史科學、精神科學の指導力に屈服せざるを得ないのである。

さて民族學を屈服せしめた精神科學が、自ら民族興隆の理念を把握せんと企圖するは明である。然るに、反歴史的傾向を有するナチス革命は其の理念を混濁せしめんとする。斯の故に、斯學は、理念を自ら發見し、混濁から防衛せんとする。されば、民族の歴史的世襲を維持せんが爲の鬭争こそナチス革命の渦中に於ける斯學の果す可き役割である。

四

精神科學が、右に述べた如き概念、指導力、役割を有するが爲には、學者は、次の實踐をなさねばならぬ。即ち、リットによれば、學者は、具體的現在に沈潜し、現在の中から過去の固有の生命を把握し、これに無條件に歸依す可きである。而して、かゝる實踐は、現在に於て存分に生きる過去の固有の生命が、更に、自己を越えて生きんとする傾向 (Tendenzen) を把握し、生命の恣意的志向 (willkürliche Gesinnung) を排除する事

Auf. 3, S. 8, (Leipzig 1928) „Individuum und Gemeinschaft“ (Leipzig 1926) „Einleitung in die Philosophie“ (Leipzig 1933)

Th. Litt, a. a. O. S. 16.

4) リットは、こゝで歴史を取り入れた民族概念が如何に規定されるかといふ難

を意味する。又、此の實踐は、具體的な現在と過去を邂逅せしめる可き所謂「歴史的理解」(geschichtliches Verstehen)を意味する。此の場合、過去の復活即ち、「歴史的回想」(geschichtliche Erinnerung)が造形力を有する現在の「歴史的體驗」(geschichtliches Erleben)の犠牲となる危険が存するとは云へ、右の實踐は、「過去の中から現在を鼓舞すると同様に現在の中から過去を鼓舞す」可き「體驗」と「回想」との科學的結合方法に合致すること云う迄もない。

以上述べたる學者の實踐は、ナチス國家と如何に結合するか。そも、歴史は、時代に於て生きることも時代に時代を越へて生きるが故に、歴史研究者は、時代の兒ではあるが時代の寵兒ではない。従つて、學者の實踐が、結果に於て、民族の生存權、自己放棄の意味、並に、國家形體の確定、缺除が、民族に與へる影響を教示する事は、時代の必要とするものであるが、時代の賞讃するものではない。かくて、ナチス國家は、民族の生命を肯定し確認せんとするが故に、かゝる學者

の實踐をこそ求む可きである。又、學者は、此の實踐の前提に「内的自由」(innere Freiheit)を要求するが、其れは科學の指示に基くが故に、國家は其れを許す事に依り初めて學者を全體に奉仕せしめ得るのである。逆に、國家が此の自由を自由主義的なものとして拒否すれば、國家は、思想の貧困を暴露し、超個人的な民族の生命を利己的に遮斷するものである。

五

以上我々は、ナチス國家と精神科學を結合せしめんとするリットンの企圖を窺つたが、彼の大膽にして且含蓄多き勞作は、我々に對し、少からぬ示唆を與へる。併しながら、リットンの残した問題もないではない。例へば、精神科學が理念を把握すると説く限り、斯學の法則性や哲學と科學との分野が問題となり、リットンに従つて、斯學が時間的一般性を得る限り、其の空間的一般性が問題となる。更に、歴史を取り入れた民族概念が究明されざる限り、精神と肉體との關係は、リットンの結論を保留せしめる可く、此れと關聯して、彼が

問を有能の學者に委ねて居る。Th. Litt, a. a. O. S. 18.

6) Th. Litt, a. a. O. S. 22.

歴史を單に精神的に解する時、物質の精神に對する獨
自性が克服されまい。又、哲學的人間學の内容の不明
は、精神科學の一般性を支へるに十分ではない。又、
學者の内的自由は、ナチスの新自由概念（フ）と同一範疇に
屬すると思はれるが、自由概念の規定は、ヨリ、深き考
察を要す可く、更に、民族の歴史的世襲を重視せるリ
ットが、ナチス革命の反歴史的側面を指摘し、ナチス
國家を瞬間的、時代的なものと見做し、且民族の手段
と觀る限り、其れは、少くともドイツ社會の動—反動
運動を背景とする。従つて、假りに精神科學が一般性
を得たとするも、社會の動—反動運動を是認する限り、
現實に於ける國家と科學の背反は、容易に解決されぬ
であらう。又、こゝで、リット（リ）の國家觀を吟味する場
合、我々は、更に廣き視野を要するであらう。尙、リ
ットの提起する問題は、此れに盡きるものではないが、
我々のリット批判は、後日の課題としよう。

註 精神科學の法則性は多くの學者の論する處であるが、リ
ットは、こゝで、直接、法則に言及しない。併し、リット

テオドル・リット「ナチス國家に於ける精神諸科學の地位」

が本稿四節に於て、生命の「傾向」を説く場合、之れを一種
の法則又は法則以上の概念として理解されとも言へよう
か。ともあれ、所謂法則なき科學が成り立つか、理念、世界
觀は哲學の領域に非ずやといふ問題が残される。ゾムバル
トは、其の著「三つの經濟學」の第三篇（理解的經濟學）第十
五章（法則）第三節（邦譯三一三頁—三一八頁）に於て、「傾
向」を取り上げ、これを、社會事象の「同様性」と結合せし
めて「未來に圖取りされた事象」と解し、傾向の主張は、事
象の從來の經過を未來に圖取りすることを意味し、傾向の
妥當價值は、必然性に非ず確率にありとなし、傾向の中に
概念を發見すれば、經驗的法則の爲し得ない様な、現實事
象の總括が出来るとなす。

7) 中川教授著、「ナチス社會政策の研究」第十章、ナチスに於ける新自由の意義、
就中、第六學問的自由(177頁—192頁)參照。